

3・11から足尾へ

—旧足尾銅山における〈知〉の政治の現在—

周 藤 真 也

要旨

1990年代からはじまる、旧足尾銅山における鉱山遺構を産業遺産として再評価する動きは、2000年代に入ってユネスコの世界遺産への登録運動として展開されるようになった。この過程の中で、足尾銅山の遺構は、鉱害事件の「負の遺産」として位置づけられるとともに、「日本の近代産業発祥の地」として、その先進性が評価されるようになった。「全町まるごと博物館」をキャッチフレーズとする「エコミュージアム構想」も、そうした鉱山遺構の産業遺産化と、鉱山の歴史や記憶を「まちづくり」や地域活性化の資源として利用する試みとして位置づけることができる。しかしながら、足尾における「エコミュージアム構想」は、森林伐採や煙害ではげ山となり緑化活動が展開されている北部地域へと重点的にまなざしが向けられることによって、いささか奇妙なものになっているように思われる。本稿では、足尾銅山の記憶をめぐる人々の活動を通して、足尾における〈知〉の枠組みの現在について、その系譜を含めて検討する。

1. はじめに—鉱山の記憶をめぐる

2011年3月11日の「東日本大震災」を引き起こした地震において、栃木県日光市足尾町¹⁾にある旧足尾銅山の源五郎沢堆積場では、堆積してあった鉱滓の表層崩壊が発生した²⁾。崩壊した鉱滓は、堆積場下にある鉄道（わたらせ渓谷鐵道線）の路盤を埋め、一部は渡良瀬川の河道内に達した。これにより、渡良瀬川の川水から環境基準の約2倍の鉛が検出されることになった。

このことは、明治20年代に始まる「足尾鉱毒事件」が、今現在も未解消の問題であることを明るみにするものである。足尾町内には、旧足尾銅山の鉱滓の堆積場が現在もなお

1) 栃木県上都賀郡足尾町は、2006年3月20日に今市市、(旧)日光市、塩谷郡藤原町、塩谷郡栗山村と新設合併を行い、(新)日光市となった。(新)日光市の市役所(本庁)は、旧今市市役所の建物を使用している。本稿では、特に必要がない限り、旧足尾町時代を含めて、単に「足尾町」と記載する。

2) 2011年3月13日付、『朝日新聞』栃木版の記事などによる。

14か所存在している。中でも簀子橋堆積場は、足尾町の中心街である通洞地区^{つうどう}を横切って渡良瀬川に合流する洪川の上流部に巨大な堤防を築いており、幾度となく安全性に対する不安が叫ばれてきた。さらに、廃坑から湧出する地下水は、金属成分を含んでいるため、そのままでは渡良瀬川に流すことができない。かつて足尾銅山を経営した鉱山会社は、現在でも旧銅山の「遺産」である堆積場を管理し、金属成分を含んだ水は、町内にある浄水場で処理をする義務を負っている。こうした旧鉱山の遺物の管理は、鉱山の閉山（1973年）から40年近くを経た現在でも続いており、恒久的に続けていく必要のある性質のものである³⁾。

こうした足尾町において、町内に点在する足尾銅山に関わる遺構を産業遺産として見直す動きがはじまるのは1990年代のことである。1994年に通商産業省（当時）系の財団法人がまとめた『エコミュージアムあしおの創造——足尾地域開発基本構想策定調査報告書』（広域関東圏産業活性化センター1994）は、足尾町内に点在する足尾銅山の遺構が産業遺産として価値があることを気づかせるきっかけを作ったという点において特筆することができる。たしかに、足尾銅山の閉山後、鉱山会社と町は、鉱山跡を観光資源として活かすことを検討し、1980年には「足尾銅山観光」という町営の観光施設が誕生している。これは、通洞地区にあるかつての坑道を利用して銅山の歴史を展示する施設である。しかし、この施設は、鉱山施設のごく一部を利用したものにすぎず、町内全域にわたって存在する鉱山関連施設や社宅などはそのままとなっていた。

足尾における「産業遺産」に対する取り組みは、2000年代に入って本格化する。足尾町の広報誌「広報あしお」では、2002年から町内の「産業遺産」を取り上げる記事が連載されはじめ、2003年には国土交通省関東運輸局が、『産業遺産を活用した観光振興方策策定調査（栃木県足尾町周辺）報告書』（国土交通省関東運輸局2003）をまとめるに至る。町も、「産業遺産と環境学習のまち」をテーマに掲げ、『『エコミュージアムあしお』構想』の推進を行っていく。そうして、2市1町1村と合併し新しい日光市となって以後の2007年に、文化庁からの募集に応じ、ユネスコの世界遺産の推薦候補として足尾銅山を応募するに至る。新市の教育委員会の生涯学習課には世界遺産登録推進室を設置して担当者が配置され、産官学民の協働により世界遺産登録活動が進められている。

本報告は、こうした近年の足尾における産業遺産に対する取り組みの中で、どのような「〈知〉の政治」が見られるのかを分析するものである。産業遺産化は、一般にそれがもつ「否定的側面」を消去し、「肯定的側面」を美化する⁴⁾。このことは必然的なものであり、

3) 足尾町内の堆積場、排水処理施設の配置については、布川（2009：37）等の図を参照。

4) 荻野（2000：214）は、尾去沢鉱山（秋田県）の事例を取り上げて、廃鉱が「博物館化されることで、鉱山の栄光だけが強調され、負の記憶は確実に消されていく」ことを指摘した。その上で、「産業遺産化によってその否定的側面が『消毒』されても、依然として負の遺産としての象徴性を宿しており、「訪れる者の想像力をかきたてる」という。「物自体の力が、博物館として保存されること

足尾銅山においても例外ではない。しかしながら、「足尾鉍毒事件」と田中正造の活動で知られる足尾銅山は、消去してもしきれない「否定的側面」を持っている。こうした性質は、一般的に「負の遺産」と言われるが、足尾銅山においては、そうした「否定的側面」はどのように扱われ、どのように処理されているのであろうか。

2. 鉍毒事件と足尾へのまなざし

足尾で生まれ育った年配の「足尾人」と話をすると、しばしばかつての足尾に対するまなざしについて耳にする。すなわち、「桐生など（渡良瀬川の下流域）に出掛けた際、足尾のことを話題にすることができない、足尾の人間であることを隠さなければならなかった」と。

こうした言葉は、「足尾鉍毒事件」における鉍害の加害者である渡良瀬川上流域の足尾と、被害者である渡良瀬川下流域との関係性を象徴するものである。足尾銅山が原因とされる鉍害は、渡良瀬川に生息する魚などの生物を死に至らしめ、渡良瀬川から農業用水を取水する地域において作物が育たないといったなどの現象が生じたほか、ひとたび洪水が起これば、洪水によって堆積した土砂が及ぶ広い範囲に影響を与えた。その範囲は、最大で利根川合流後を含む群馬県南東部、栃木県南西部、埼玉県北東部、茨城県南西部、千葉県北西部など広範に及んだ。1890年前後から顕著になる下流域の鉍害は、1947年のカスリーン台風による洪水でも被害を発生されるなど長年に渡って主に農民を苦しめることとなった。

足尾町は地理上、下流域との関係が重要であった。なぜなら、渡良瀬川の上流の源流域を占める足尾町だけが栃木県であり、渡良瀬川を下るとすぐに県境があり隣の群馬県に達する。こうした地理上の特徴は、同じ栃木県内の他の市町村に行くのに必ず峠越えが必要であることを意味している。ところが、峠越えの道路は道幅も狭く曲がりくねっており、細尾峠を越えて日光市街に出るのには、かなりの時間を要していた⁵⁾。したがって、足尾町の町民は、渡良瀬川沿いに敷設された鉄道⁶⁾を使って桐生方面に出ることが多かった。

による消毒作用にもかかわらず、鉍山の栄光だけでなく、その悲惨も感じさせる」(荻野 2000 : 214) というのである。

5) その一方で、渡良瀬川に沿ったルートも途中で峡谷となっている区間がある。こうした点は、足尾が地理的に「秘境」であることを指し示すとともに、中禅寺湖方面から峠を越えて足尾に入るのが古代からのメインルートであり、足尾が古代より上野（こうずけ）（群馬県）ではなく下野（しもつけ）の国（栃木県）に所属してきた所以でもある。なお、足尾銅山で採掘された銅鉍石は、足尾町内で選鉍、製錬の後、細尾峠を越えて日光市街側の清滝地区まで索道で運び、精錬（電気分解の仕組みを利用して非常に純度の高い銅を精製して製品として出荷する工程）を行っていた。日光という都市は、近代以降、東照宮の門前町としてだけでなく、鉍山都市としての性質を持ち合わせていた。奥日光の観光開発も中禅寺湖や大谷川の水を利用した電源開発という主題を抜きにして考えることはできない。

6) 鉍山会社により敷設された足尾鉄道は、1918年に国有化された。後の国鉄足尾線、現在のわたら

こうした栃木県内の他の地域との交通上の不便さが解消されるのは、細尾峠の下に掘られた日足トンネル（総延長 2,765m）ができた閉山後の 1978 年のことである。

また、下流域からのまなごしは、足尾町には鉱山関係以外の産業がないに等しいこととも関係している。農地は町内合わせても 89ha（町全体の 0.5%、1972 年当時）⁷⁾ にすぎず、水田は皆無に等しく、鉱山とまったく関わりなく生活している町民はほとんどいないという鉱山町特有の事情も輪をかけていた。例えば、商店主も鉱山会社をはじめ鉱山に依存して暮らす人々を相手に商売をしていたのであり、公務員の給料もそうした人々や鉱山関係会社が納める税金が原資であるからだ。

足尾銅山の遺構の産業遺産化は、足尾や足尾出身の人々に、自分たちの町に対して誇りを持たせる効果をもたらしたであろうことは想像に難くない。例えば、次のようなことが強調される。「日本の近代産業発祥の地」、「坑内電車」が導入されたのは足尾が最初、「生協」の発祥は足尾、「産業安全運動」⁸⁾ は足尾から、最盛期には人口は 3.8 万人に達し、県都の宇都宮に次ぐ大きな町であったこと、戦前は、足尾銅山の見学が修学旅行の定番のひとつであり、年間 2 万人の生徒・児童が足尾に修学旅行で訪れていたこと、などなどである。こうした語りは、足尾という町が、日本の近代化において占める位置の大きさを強調するものとなっている。そのほかには、富士通、ソニー、横浜ゴムといった有名企業の原点が足尾銅山を運営した鉱山会社と関係していること、文豪たちが足尾に通い足尾を題材に小説を書いた⁹⁾ ことなどが強調される。

こうした足尾に対する語りは、鉱害に関することが見られる。「日本ではじめての公害事件」であるとともに、鉱害対策についての取り組みとしても先駆的であったことが強調される。例えば、1897 年の政府による予防工事命令に対しては、鉱山会社は 24 時間体制で工事を行って期日に間に合わせたこと、1956 年の自溶炉製錬技術の導入により煙害を発生させる元となっていた亜硫酸ガスを完全に回収して硫酸に精製するようにしたことは、世界で初めて実用化されたものであったこと、足尾のはげ山に対する緑化の取り組みは明治時代からはじまっていたことなどである。

しかしながら、そうした言説には、足尾の鉱害は言われていたほどのことはなかったといった、修正主義的な表現が時折見え隠れすることがある。もちろん、そこには、鉱害に対するより正確な理解、例えば、足尾の山は煙害ではげ山になったのではなく、伐採や山

せ溪谷鐵道線である。

7) 2004 年のデータによれば耕地面積は 6ha であり、そのうち作付面積はわずか 2ha である（農林水産省市町村別データ長期累年耕地面積（栃木県）(http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/sityo_tyouki/kouti/k9.html) による)。

8) 産業安全運動は、1912 年に足尾銅山の鉱業所所長が、アメリカで提唱されていた Safety First を「安全専一」と訳して坑内外に掲げたのが最初であるとされている（産業安全運動 100 年記念展示パンフレット（2011 年 10 月 12～14 日、於・東京国際フォーラムロビーギャラリー）に基づく）。

9) 例えば、夏目漱石『坑夫』、芥川龍之介『日光小品』など。

火事ですではげ山になっていたところに、煙害で植物が育たなくなってしまったものである、といったことがらが含まれている。足尾についての語りの中に、鉱害事件に関して、修正主義的な言説が含まれているように聞こえるのは、下流域のあまりにも強い言説に対する抵抗の現れとして、足尾の人々の欲望を解釈によってそこに見出してしまうわれわれのまなざしの問題であるのかもしれない。

下流域においてもまた、足尾銅山の鉱害に関して明らかに誤った言説が流布していることがある。たとえば、筆者は、群馬県内の渡良瀬川下流の被害を受けた地域において、「草木ダム¹⁰⁾の水が碧いのは銅イオンのせいだ」といった話を耳にした。確かに、銅イオンを含む水溶液は一般的に青～緑色を呈することは知られているが、渡良瀬川の水で十分に希釈されるので、微量の銅イオンが含まれることがあるとしても、それが原因となって渡良瀬川の水自体が肉眼でわかるような緑色を呈するようなことはない¹¹⁾。このことからわかることは、鉱害の被害を受けた地域にとって、足尾は現在もお監視の対象であるということである。草木ダムでは定期的に水質を検査してその結果を公表しているが、被害地からは定期的に足尾に来て独自の水質検査を行っている。

足尾銅山の鉱害の被害を消去し、足尾銅山の記憶を美化してしまうかもしれない産業遺産化の取り組みは、渡良瀬川下流域の人々を不安にさせる要素を持っている。現に、2007年に文化庁に世界遺産候補として申請した際、日光市教育委員会は下流域の団体から抗議を受けたという¹²⁾。

足尾において、足尾を体系的に語る試みは、行政による公的な形では、完成することはなかった。旧足尾町では、いずれも構想はあったものの、町史の刊行はついに行われることはなく、足尾または足尾銅山についての本格的な歴史博物館¹³⁾が設置されることはなかった。町営の観光施設「足尾銅山観光」においては、各時代の採掘の様子の人形を使った展示説明が中心で、選鉱所、製錬所付近の模型、若干の鉱石と遺物の展示と、足尾で鑄造を行った寛永通宝（足字銭）に関する展示のみで、通路に比較的小さな1枚の年表が設置されている程度である¹⁴⁾。こうした展示に対して、しばしば鉱害関係の展示がないと指摘される。また、鉱山会社は銅山観光の開業にあわせて、町民会館の一角に資料室を設けたが、現在は閉鎖したままになっている。

10) 渡良瀬川中流にある多目的ダム。足尾銅山からの鉱害を防ぐことを目的の一つとして構想されたが、建設段階において公式的な目的からは除外された。

11) 銅イオンだけでなく、確かに銅には緑色のイメージがつきまとう。銅が酸化することによって生成する緑青や、硫酸銅の緑色のイメージによって取り違えが起きると考えられる。

12) 日光市教育委員会での聞き取りに基づく。

13) 日本では「博物館」という名称使用についての法的制限はないが、博物館法に基づいて運営される博物館と区別するために、地域の歴史博物館は「郷土資料館」等の名称で設置されることが多い。

14) 実は「足尾銅山観光」には、もう1か所に足尾に関する年表が掲げられており、入場者は誰でも見ることができるのだが、順路からはずれた位置にあるため、この年表を見る観光客は皆無に等しい。

こうした状況に対して、民間の有志で2005年に立ち上げたのが「足尾歴史館」であり、同名の特定非営利活動法人（いわゆるNPO法人）によりボランティアによって運営されている。この団体は、2002年に公民館主催で開催された「ふるさと足尾歴史セミナー」に集まった受講生有志によって結成された「足尾楽迎員協会」¹⁵⁾を母体としている。足尾町から廃止された旧スケートセンターのレストハウスの建物を借り受け、展示物および展示施設はすべて会員等からの寄付・寄託により構成している。こうした形態での歴史博物館は全国的に見ても稀なケースであり、鉱山関係の歴史博物館ではほかに類例を見ない¹⁶⁾。足尾銅山で使用された道具や、足尾銅山の開発に尽力した人々、繁栄していた足尾の街並み、鉱害事件と緑化活動など、テーマ別にパネル展示、遺物や復元模型の展示がされている、手作りの歴史博物館である。

筆者は、日本国内における各地の炭鉱および金属鉱山に関わる歴史博物館の訪問を行っているが、その経験から言えば、①炭鉱の場合、近代に特化した語りになる傾向が強い¹⁷⁾のに対し、金属鉱山の場合は、近世（あるいはそれ以前）からの連続性で語られることが多い¹⁸⁾、②炭鉱の場合、全国の炭鉱に共通するステレオタイプな語りがあるが¹⁸⁾、金属鉱山の場合、それほど均質化されていない、③炭鉱の場合、炭鉱住宅（炭住）における生活がノスタルジックに語られるのに対して、金属鉱山の場合、鉱山社宅での生活についての語り相対的に希薄である¹⁹⁾、④炭鉱の場合、労働運動に対する言及がほぼ必ず見られる²⁰⁾のに対し、金属鉱山の場合かなり稀であるといった傾向がある。足尾銅山の場合も概ね上述の特徴の通りであるが、江戸時代後期には銅の産出量が落ち、閉山に近いような状態であったことや、明治以降の知名度から、近世からの連続性が語られる一方で、近代以降の銅山として強調される特徴を持っている。

15) 「楽迎員」とは、博物館の学芸員の振りであることはいうまでもない。

16) ほかに特異な運営形態の鉱山関係の資料館としては、個人で開設した常磐炭田のみろく沢炭鉱資料館（福島県いわき市）がある。

17) これには、石炭は近代以前に発見されていたとしても、煤煙や臭いなどの問題からあまり利用されることがなく、産業革命時のエネルギー革命によって採掘がはじまるといった事情も関係している。また、金属鉱山における近世以前との連続性に依存した語りは、特に西日本においてその傾向が強い。

18) 例えば炭鉱においては、戦後のスクラップ・ビルド政策の過程で、ビルド鉱として指定されたことにより、いかに機械化・自動化が進み効率的に採掘が進められたのかということが、「自慢」的に展示されることも多い。

19) 例えば、宮城県にある旧細倉鉱山では、鉱山社宅である「佐野社宅」が、リリー・フランキー原作の映画『東京タワー～オカンとボクと、時々、オトン～』（2007年）において、「筑豊炭田の炭鉱住宅」としてロケで使われた。現在、佐野社宅の公開は、細倉鉱山の社宅としてだけでなく、同映画のロケ地という価値づけと相まって、映画のロケのセットを残す形で保存・公開されている。このことは、金属鉱山の社宅が、端的に炭鉱住宅のノスタルジーに対して「負け」ていることを表しているものであると言わざるを得ない。なお、同鉱山跡に現存する施設を鳥瞰する光景は、常磐炭鉱を舞台とする映画『フラガール』（2006年）において、炭鉱のボタ山から主人公が見る光景として利用されている。

20) ただし、労働運動の激しさが、写真や労働組合の赤旗の展示などによって、象徴的に言及されるのみであり、紛争の具体的な中身に立ち入ることはない。

3. 松木溪谷の「保全」と緑化活動の位置

産業遺産の保存という主題は、当該産業が近代化に関連していたのに対して、ポストモダンの位相を伴う。このことは、近代が世界を脱魔術化したのに対して、産業遺産の保存は世界の再魔術化に関係していることを意味することになる²¹⁾。

しかしながら、足尾における産業遺産への取り組みは、世界の再魔術化において、少々異物が含まれていると考えざるを得ない。これは、旧足尾町が「産業遺産と環境学習の町」というテーマを掲げて取り組んだように、産業遺産と並んだもう一つの「観光」の柱として、「環境学習」というものを打ち立てたことと関係している²²⁾。環境学習とは、「足尾鉍毒事件」における鉍害の源である足尾を活用する取り組みであるが、ここで扱われる鉍害は、渡良瀬川下流域のそれよりも、足尾町北部地域の渡良瀬川源流域にまなざしが向けられる。すなわち、伐採、山火事、煙害により山の木がなくなり、はげ山となった結果、雨によって表土が流出し、岩盤が露出してしまった独特の景観に対するまなざしである。

足尾における緑化事業は、明治期よりの歴史を持っているが、本格的に緑化が進むのは、足尾銅山の製錬所からの亜硫酸ガスの放出が基本的に停止する1950年代後半以降のことである。特に国土交通省による緑化事業は、露出した岩盤に「山腹工」と呼ばれる間伐材で囲った枠を階段状に設け、その中に土を入れて植樹をしていくという大がかりなものである。

旧足尾町は、北部地域の渡良瀬川源流域の入り口である足尾砂防ダム付近の公園整備を1996年度から行い、2000年には足尾環境学習センターをオープンさせた。

しかし、このように、産業遺産と環境学習という二つの柱を立てることは、「エコミュージアムあしお」というテーマに対して、微妙な齟齬を来たしているのではないかと思われる。これには、①「エコミュージアム」という博物館思想が、必ずしも正確に理解されていないこと、②「エコ」という接頭語が自然環境の保全、人間との共生を意味する一連の考え方を想起させることが関係していると思われる。

「エコミュージアム」という概念は、一般的にフランスのリヴィエール (G. H. Rivière) が提唱した概念として知られているが、この概念には、従来の博物館が、博物館という施

21) 観光と世界の再魔術化との関係については、須藤 (2008) を参照。

22) 実際のところ、足尾町の観光客のうち、かなりの割合を占めるのは団体客であり、中でも修学旅行や遠足などの教育旅行の占める割合が大きい。修学旅行について言えば、特に神奈川県、千葉県、東京都、埼玉県などの小学校の修学旅行地として、日光が選択されるケースが多い。東照宮をはじめとする日光の寺社、奥日光の自然、鬼怒川温泉郷でのレジャーなどの組み合わせにおいて、社会科や環境学習と密接に関係する足尾は、教育旅行において一定の評価を得ている。なお、環境学習については、いくつかの系譜が考えられるが、そのひとつとして、公害に関する学習が1980年代後半以降変質していったものであるという要素を考えておかなければならないだろう。

設の中で、遺物を収集、保存し、展示を行うのに対し、地域全体を博物館として見るというまなごしの転換が含まれている。すなわち、「エコミュージアム」は、「世界の博物館化」という潮流の中で理解することができる博物館思想である。中でも、産業遺産は「エコミュージアム」という概念に適合的である。なぜなら、巨大で移設が困難な建造物や、旧産業によって形成された景観は博物館の中に収容することができない。そうした建造物や景観を保存しようとするならば、博物館学的欲望の中では、「エコミュージアム」という思想がそれを媒介する。

先に触れたように、「エコミュージアム」という概念を持ち込んだのは、1994年の財団法人による報告書である。これを受けて、足尾町は1997年に『エコミュージアムあしおの創造：整備構想策定調査報告書』（足尾町1997）を作成し、全面的に「エコミュージアム」概念を受け入れるに至る。さらに、2005年には『エコミュージアムあしおの創造：環境のまちづくり（松木地区）計画』（足尾町2005）なる報告書を作成する。しかしこうした足尾町による報告書に見られる取り組みは、産業遺産にも言及するものの、足尾町北部地域の計画、特に源流域への入り口となる足尾砂防ダム付近の公園整備や、環境学習への対応、鉱害により廃村となった松木村の遺跡保存などに集中する。そして、松木地区の「日本のグランドキャニオン」と呼ばれる「溪谷美」を、保全の対象とすることがうたわれる。

社会構築主義的な視点から言えば、北部地域の独特の景観は、足尾銅山の鉱害によって形作られた文化的景観であると見ることができるものである。また、世界遺産登録推進運動がそうであるように足尾銅山の産業遺産を中心にエコミュージアム化を推進するのであれば、当然、そうした視点で北部地域をまなごさなければならぬだろう²³⁾。それにもかかわらず、これらの報告書においてあたかも②の意味において北部地域、特に渡良瀬川源流域をまなごそうとすることには、「エコミュージアム」の「エコ」が近年の自然環境の保全を主題とする意味に引きづられただけであろうか。

筆者は、足尾におけるエコミュージアム構想の背景には、1990年代に渡良瀬川源流域にある松木地区に廃棄物処理場を建設する計画（これを「ガイア計画」ないしは「ガイア足尾計画」と称した）への対抗があったのではないかとみている。1990年代はじめ、大手ゼネコン27社が「渡良瀬研究会」を組織し、松木地区約500haの土地に総処分量4.5億トン、使用年数45年の廃棄物（産業廃棄物、一般廃棄物）の最終処分場を建設する計画を提起した。廃棄物運搬のために、東北道栃木IC方面から、関越道赤城IC方面から

23) 現に、文化庁に提出した提案書（栃木県日光市2007）のなかでは、渡良瀬川源流域の入口一体の緑化事業を行っている地域を重要な「文化的景観」として保全（？）の対象として設定している。だが奇妙なことに、足尾の市街地など産業遺産の点在する地域については、文化的景観の保全措置を講ずるとされるものの、「緩衝地帯（バッファゾーン）」として設定され、緑化事業を行っている地域よりも「文化的景観」としては重要度が低く位置づけられているのである。

道路を建設し、あわせて足尾町の活性化と再生に関連する事業に参画するというものであった。同研究会は、1992年に「報告書」（渡良瀬研究会 1992）としてまとめ、足尾町に協力を要請する。足尾町では、一部ではこの計画を歓迎する向きもあったが、町長および町議会は全面的に反対することを決議し、渡良瀬川流域の14市町村が共同して、この計画に対する反対運動を展開するに至るのである²⁴⁾。そのときに恐れられていたのは、足尾銅山によって生じた鉱害を「第一の公害」とするならば、「ガイア計画」による廃棄物処理場によって、「第二の公害」を出す可能性であった。

「ガイア計画」に対し、地元の足尾町や渡良瀬川流域自治体が反対するだけでなく、環境学的な評価もなされた。たとえば、日本環境学会は、この計画に注目し、当時社会問題となっていた東京都日の出町の一般廃棄物最終処理場問題に言及して、「水源地に廃棄物処理場を作るべきではない」との一般的見解を論拠として、「ガイア足尾」計画に対して疑問を呈している（日本環境学会 1994）。

ところで、1994年の通商産業省系財団法人による報告書が、エコミュージアム構想を打ち立てたことは、当時の日本で沸き起こりつつあった「エコミュージアム・ムーブメント」を背景にしていると考えられる。エコミュージアムは、1970年代にはすでに日本で紹介されていたが、その理念の本格的な導入がはじまるのは、1980年代後半以降の新井重三らの活動によるところが大きい。日本で最初にエコミュージアムとして取り組みを始めたのは、山形県朝日町とされるが、同町における1992年の国際シンポジウムの開催を契機として、全国にエコミュージアムの概念が浸透しつつあったところであった（日本エコミュージアム研究会編 1997：43）²⁵⁾。さらに、1990年代前半の当時の日本において、産業遺産に対する注目が集まりつつあったことも背景にあるだろう。日本において幕末から第二次世界大戦期までの間に建設された産業、交通、土木にかかわる建造物のうち、日本の近代化を支えた文化遺産を「近代化遺産」として、文化財に指定するようになるのは1990年代に入ってからのことであるし、当時文化財制度を管轄する文化庁は、1990年代はじめに各都道府県の教育委員会に対し、「近代化遺産」についての調査を実施するよう要請を行っていた。また、産業遺産に対するまなざしも、「産業考古学会」の活動などが徐々に紹介されるようになっていた。

現在の足尾における市民による取り組みの一つである「足尾に緑を育てる会」（2005年からは特定非営利活動法人として栃木県から認定を受ける）による緑化活動の取り組み

24) 「ガイア計画」への反対運動は、足尾町が渡良瀬川下流域の市町村と協力関係を構築して行ったという点において、特筆することができるだろう。足尾町は、確かにそれまでも国鉄足尾線の廃止反対運動を沿線自治体と共同して行う（サクラ乗車運動など「過激」な運動で全国的にも知られていた）などのことはあったが、下流域とは潜在的には対立関係にあったのに対して、公害の可能性をめぐって利害が一致したのである。

25) 新井らは、『実践エコミュージアム入門』（新井編 1995）などをまとめ、1995年には「日本エコミュージアム研究会」を発足させる。

は、その出発点を 1990 年代中葉に持っている。その発足の経緯は、次のようなエピソードとして語られている。1994 年に足尾銅山と鉱害に関する資料等の収集と情報交換を目的として「わたらせ川協会」を発足（1994 年）させていた²⁶⁾が、同協会が 1995 年に大畑沢（北部地区にある建設省（当時）が管理する砂防ゾーン）に桜の木を植えたところ枯れてしまった。このことを、地元の大学の教授に相談したところ、「桜の木を植えて花見がしたいのか、それともこのように荒れ果てた景観を見て何か感じないか」と言われたという（神山 2008：15）。

こうしたことから、同協会を含む 5 つの市民グループ²⁷⁾が集まって緑化活動を目的とした「足尾に緑を育てる会」を発足させ、国土交通省や林野庁、栃木県と連携して緑化活動を行っている。具体的な活動としては、植樹デー、草刈デー、観察会などのイベントの開催、グリーンフォーラムと称するシンポジウムの開催、学校をはじめとする団体を対象とした体験植樹会の受け入れである。春の植樹デーは、年々参加者が増え、2 日間であわせて 1,500 名を超える参加者が集まるようになった。体験植樹も、年間約 150 団体の受け入れを行っているため、日常的にも業務があり、3 月から 11 月にかけて、月 1 回週末に設けられる「作業デー」には、下流域の会員やボランティアが集まってくる。また、先述した「足尾環境学習センター」は、現在は指定管理者制度により、同会が日光市から運営を委託されている。

足尾町の北部地域の入り口にあたる間藤地区^{まとう}まで来ると、現在でも山の緑が薄く、地肌が見え隠れしていることがわかる。そして、さらに北進して本山地区^{ほんざん}を越え、足尾砂防ダム付近まで来ると、周囲の山のいくつかは岩盤が露出し、山腹で工事が行われている光景を目にすることができる。また、すでに工事が終わった個所は、薄くではあるが植樹によって、緑が「回復」してきている様子を見ることができる。

足尾には緑が戻ってきていると言われる。たしかに、人々の努力の結果、足尾の山には木々や草が根付きつつあり、時折ニホンジカやイヌワシなどの姿を見ることができるようになった²⁸⁾。しかしながら、北部地域は、依然としてはげ山の記憶をとどめるような特有の景観を保持していることも事実である。一帯の山々に完全に緑が回復し、周辺の山々で見分けがつかなくなるとき、足尾銅山の鉱害の記憶は、別の段階を迎えることになるだろう。

26) わたらせ川協会の発足に至る人脈は、1980 年に宇都宮のライブハウス「アートスペース仮面館」で開催された連続講演会・市民塾「足尾」に遡ることができる（足尾に緑を育てる会 2011：2）。

27) 5 つの市民グループとは、渡良瀬川研究会、渡良瀬川にサケを放す会、田中正造大学、あしおネーチャーライフ、わたらせ川協会である。このうち、はじめの 3 グループは、渡良瀬川下流域を中心とするグループである。

28) ほかにカモシカやイノシシの姿も見ることができる。また、ツキノワグマが出没することがある。足尾町の中心部の近くでさえ、「クマに注意」との看板を見かける。

4. おわりに—「足尾」の忘却をめぐって

2011年3月11日の地震とそれによる津波を発端とする福島第一原子力発電所の事故において、現在、大量に発生している放射性廃棄物の処理が問題となりつつある。人間の活動によって生み出したものを永続的に管理、監視していかなければならない点において、足尾銅山における問題は、原発事故と共通している²⁹⁾。

廃棄物の問題は、記憶と忘却の問題である。われわれは、廃棄することによって、忘却する。しかし、廃棄物のいくつかの種類のは、廃棄後も管理が必要である。つまり、廃棄=忘却することと矛盾する記憶する活動がそこにあるのである。

このことは足尾という町の位置にも関連している。足尾が地勢的に不可視であるということ、つまり関東平野から山に囲まれているために見ることができないし、宇都宮市街や日光市街からも山の向こうにあるために見ることができないことは、足尾という町に対する忘却を促進する。足尾という町それ自体が、日本の近代化におけるいわば「廃棄物」として扱われているのではないのかと見ることも可能だ。

足尾における産業遺産化、世界遺産登録活動は、そうした中におけるささやかな〈抵抗〉の取り組みであるとも考えることができる。しかしそれもまた、合併後の日光市における旧市町村間の次のようなバランスの中で可能になっている。すなわち、新市は、巨大な観光都市³⁰⁾であるだけに、足尾地区に対する観光振興については、現有施設等の維持以上には力を注ぐことができない。足尾銅山の世界遺産登録活動は、新市において、足尾地区に対する観光振興策に代替するものとして、位置づけられるのである³¹⁾。

文献

- 新井重三編 1995 『実践エコミュージアム入門』 牧野出版
 日本エコミュージアム研究会編 1997 『エコミュージアム・理念と活動』 牧野出版
 荻野昌弘 2000 「負の歴史的遺産の保存——戦争・核・公害の記憶」、片桐新自編『歴史的景観の社会学』新曜社 199-220
 須藤廣 2008 『観光化する社会——観光社会学の理論と応用』ナカニシヤ出版

*

- 足尾町 1997 『エコミュージアムあしおの創造——整備構想策定調査報告書』
 —— 2005 『エコミュージアムあしおの創造——環境のまちづくり（松木地区）計画』
 足尾に緑を育てる会（編）2011 『ひろげよう、緑の絆——足尾に緑を育てる会結成15周年記念誌』
 布川了 2009 『改訂 田中正造と足尾鉍毒事件を歩く』随想舎
 神山英昭 2008 「足尾銅山緑化の歩み——取組の歴史、現状と展望」『観光文化』32(2):14-17、日

29) 筆者は、東日本大震災での福島原発の事故等について、足尾において何人かの人々から足尾と同じものを感じたということを知っている。

30) 旧日光市は世界遺産「日光の寺社」に奥日光を抱え、旧藤原町は鬼怒川温泉や周辺のレジャー施設、旧栗山村は湯西川温泉に奥鬼怒温泉郷など、それぞれ有名観光地を抱えている。

31) 日光市足尾総合支所観光課からの聞き取りに基づく。

本交通公社

広域関東圏産業活性化センター 1994 『エコミュージアムあしおの創造——足尾地域開発基本構想策定調査報告書』

国土交通省関東運輸局 2003 『産業遺産を活用した観光振興方策策定調査（栃木県足尾町周辺）報告書』

日本環境学会 1994 『ゴミの超巨大最終処分場の建設を問う——ゼネコン 27 社の足尾「ガイア計画」を検討する』

栃木県日光市 2007 「足尾銅山——日本の近代化・産業化と公害対策の起点」世界遺産暫定一覧表追加記載提案書

渡良瀬研究会 1992 『ガイア計画検討報告書』

追記

本稿は、2011年12月3日に高千穂大学（東京都杉並区）で開催された、第28回日本現象学・社会科学会大会における口頭報告に基づく。

本稿は、2009,10年度早稲田大学特定課題研究助成費、2010,11年度日本学術振興会科学研究費補助金による研究成果の一部である。